

以下 汚れあり

巻 16

M
5
(16-5)

徳武
蔵本

三平の百八

九

共五

筆の百糸九卷

か不保良社
 天狗をたどり
 かむこがこー
 石狩川の里
 うほひをまや
 あまよりゆが尺
 きりせ
 ゆくのゆまは
 甲申はむし
 志のゆま方
 八首官八首名真ゆまはまてウ

二丁オ
 三丁オ
 四丁オ
 六丁オ
 七丁ウ
 八丁ウ
 十丁オ
 十一丁オ
 十二丁オ
 十三丁オ

栢原ヶ横方
 かむこがの祭
 けき。尾埒
 菰ちち。蒲ちち
 さくらほけ
 酒やみ
 えでほをる
 位山之高き方
 くらまをり
 まひたせ
 かむこがし

二丁オ
 三丁ウ
 五丁ウ
 キ丁ウ
 セ丁ウ
 九丁ウ
 十丁ウ
 十一丁ウ
 十二丁ウ
 十三丁ウ
 十六丁オ

ちごのはな	十七丁	沓形のち	十六丁
豊宮川の釜魚の神贄	十七丁	糸古具佐	十九丁
ちごわじ	十九丁	くががち	二十丁
かんとうち	二十丁	月落烏啼のかき	廿丁

筆の万巻九卷

菅江真澄誌

おん保良社

近江國琵琶湖の邊ふかひのちりりよとあり國司よりみき建れ
 地あり六十餘は霊地霊山のきりて築壇あり社地又白龍と祭る
 祠あり子経藏あり経典輪匣の前より運慶り作る高三四尺斗り
 なる大黒天像あり袋のちと五六寸手離れ其符余の風吹吹かひあり
 四方より明障子に紗を張りたり四方より棚をたれ館中の御寄附より
 高五寸ありれ大黒天を香木より名工小間刻りて千餘あり其
 其美をいふるもいふ門守番人巖重に拜禮をせりわかれ
 遠路をゆく志すもわかれ事をいひて口をさぬそのいふ
 その番人よそりてに貸わおして此ありかか家居は受由ある
 茶屋にて精進物にて酒酌の茶店浪速の芙蓉の歌歌小禪天のちの

布傳の万巻九

一

今よりいふにせし前小かえり琵琶津海此署偏八幡嶋すて掛へり
 作生島小なり額繪馬を禁ず鳴き式をいふ此貨湯家
 小六懸りも今より大同の御辨江源武懸天文十年のまりに云
 當國保良社と建三奉行和田日向守貞長彼社と人皇
 四十七代廢帝天平寶字五年十月十一日都江州保良ノ
 莊すりて舊都之然ふ屋形今遠き舊跡とあはれか
 おし此日此保良舊都營作の義當今聞召はれ勅使保
 良小今日来着一通の勅書あり
 當社永為勅願靈社是先王再興之地也宜奉祈禮家承
 首天氣如此仍執達如件 天保十年七月十九日
 近江國保良社權宿稱 左大弁云々
 見へる保良社と淡路廢帝の舊都跡の御保良の大保良

とも梅辞まをま置に事にこそあなれ

柏原が太刀

あのかしらをかかりしにそのまは五月五日藥獵とて近江
 膳坂山小入まいざをれ登り北の遠く曲玉山麓近く弥高山湖
 のははをりあはれしは此山のまは伊吹弥三郎館跡
 まは蹴鞠場の跡あり人のいふく伊吹弥三郎と柏原弥三郎の事
 もて舊本館と今より柏原小存りて語り今思ふり同江源武懸
 天文四年十月三日香津り四三寸長が太刀を觀音城へ上りか浦
 もて引上りまは太刀の銘は柏原彌三郎為永取持治承四年
 少書付り屋形此太刀を則柏原美作守時長小作時長の家
 寶と是なりとて久り治承と高倉院の代のしりの名より

天狗とれがあり

あてのふみ九

こと國中の天狗の事會ひ事天狗小宗なる事とて飲り
 多し出羽陸奥等に止て大人も山人も或大平山出羽
 人小宗なり山鬼人肆ふ酒飲を好む天狗の事と
 了る語も山鬼の事也傳訓葉におまの事日本
 紀天狗の事星の名其疾如風其聲如雷震動可畏なる
 諸書又下りたれが故怪なりて狐と訓成し東鑑
 天狗靈託事源氏小宗た事をいへる魑魅の類と云又遠州
 掛川の近邑西方村龍雲寺小僧小福天狗の事又遠州
 我を勸請一祠の神也永此の守護神といへる禪寺に
 多くの和尚吟味あり小數百年來の事と説話奇異分り
 寺前の山を開き一社を創造一福天權現と号し又後けふりて
 土中へ鈴を掘出せり驛路の鈴をいへる事秋田久保田世宗

是觀上人越後の故郷り取り來り物語云いや文政堂のころ頭本
 郡大鹿里の農民天狗の事とて遇ひて七年を經て故郷に歸り奇異
 の事とて語り天狗天狗小天狗本葉天狗柴天狗草天狗の事
 我の本葉天狗をいへる事とて聞へる事大天狗小天狗を
 事とていへる高田侯なる此事大さけりて聞ひし事
 信濃國の事今石動山にありて江源武鑑上巻の公治三年
 五月廿九日乾米女正が女房天狗とていへる今年廿年小當古御
 飯て異國本朝名譽の事とて語り中朝鮮國の全羅道の新
 子作りた天狗の事と語り此由を今日觀音城に言上り依
 屋形の後見義賢に仰りて近日觀音城に召入りていへる事
 といへる事天狗の事とていへる事

右の事九

火をりかみ小雷社かみ雷堂かみ雷塚かみを云ひて其の跡かみの本と云
 石かみ三ツのりかみ溜かみして安かみらるる延喜式の霹靂かみ盛祭かみ日本靈異記
諸事三卷栖軒雷かみ取事かみの事かみ下かみ小字かみ諸栖軒かみ雄略
沙門天皇隨身かみ侍かみ在かみありかみ天皇かみ船かみ余宮かみの内かみまかみにかみきかみ后かみ也
 大安殿かみ小寝かみて婚かみ命かみ給かみりかみ栖軒かみ知かみりかみてかみ参かみりかみれかみ帝かみ耻かみてかみ止
 張かみ其かみ折かみ布かみ雷かみ鳴かみけかみれかみ天皇かみ栖軒かみ小かみ初かみてかみ雷かみ取かみ来かみ小
 宣かみ小かみ栖軒かみ初かみてかみ奉かみりかみ緋かみ纒かみとかみ額かみ小かみはかみけかみ赤かみ幡かみとかみさかみげかみ梓かみと
 持かみ馬かみ騎かみりかみ阿かみ部かみ山かみ由かみ豊かみ浦かみ寺かみのかみ路かみりかみ走かみりかみもかみ天かみ向かみて
 雷神かみ急かみ降かみりかみ天皇かみのかみ初かみめかみりかみしかみ雷かみ降かみりかみしかみりかみ馬
 走かみりかみ假かみ令かみ雷神かみ降かみりかみ我かみ日本かみ於かみてかみ何かみぞかみ天子かみのかみ初かみめかみりかみしかみ聞かみきかみしかみ令
 下かみりかみ豊かみ浦かみ寺かみのかみ飯かみ圍かみのかみ間かみ小かみ雷かみ隨かみてかみありかみ栖軒かみ悦かみてかみ興かみふ

載かみ卑かみめかみ大宮かみ持かみ向かみてかみ奏かみ問かみをかみ帝かみ雷神かみ見かみまかみしかみ小かみ眼光かみ耀かみ
 てかみ恐かみりかみ天皇かみ怖かみてかみ驚かみ息かみ進かみみかみ階かみみかみ更かみ小かみ飯かみとかみありかみしかみ階かみをかみ
 處かみ雷かみ圍かみりかみ小治かみ田かみ宮かみのかみ邊かみにかみありかみ其かみ後かみ栖軒かみ卒かみけかみりかみ天皇
 初かみてかみ送かみ葬かみのかみ後かみ雷かみのかみ階かみにかみ跡かみ小かみ墓かみをかみ築かみきかみ石かみ碑かみとかみ建かみ取かみ雷かみ
 栖軒かみ之かみ墓かみ中かみ記かみせかみ給かみりかみ雷神かみくかみりかみ階かみかかみりかみ石かみ碑かみとかみ打かみ碎かみしかみるかみ
 天皇かみ又かみ碑かみとかみ建かみ元かみのかみ下かみにかみ記かみせかみ給かみりかみ又かみ書かみ紀かみ雄かみ略かみのかみ
 事かみ記かみ小七年かみ秋かみ七月かみ甲かみ戌かみ朔かみ丙かみ子かみ天皇かみ詔かみさかみりかみ部かみ連かみ螺かみ贏かみ曰かみ朕かみ欲かみ見かみ
 三諸かみ岳かみ神かみ并かみ神かみ也かみ或かみ云かみ此かみ山かみ之かみ神かみ為かみ天かみ加かみ代かみ主かみ汝かみ脅かみ力かみ過かみ不かみ自かみ行かみ捉かみ来かみ螺かみ贏
 答かみ曰かみ試かみ往かみ捉かみ之かみ乃かみ登かみ三諸かみ岳かみ捉かみ取かみ大蛇かみ奉かみ示かみ天皇かみ天皇かみ不かみ齋かみ戒かみ其かみ雷かみ虺かみ目かみ精かみ赫かみ々かみ天皇かみ畏かみ蔽かみ目かみ不かみ見かみ初かみ入かみ殿かみ中かみ使かみ放
 於かみ岳かみ仍かみ改かみ賜かみ名かみ為かみ雷かみ云かみ大蛇かみもかみ雷かみもかみをかみすかみまかみのかみ跡かみ

かみかみのかみ下かみりかみ九

日本靈異記下卷 雷の聲を得て強力の子を生事し之より
 り敏達天皇の御世尾張國阿育知郡^{紀伊}の片輪郷の農
 夫あり田を作り水と川に注ぎ雨を引り金杖を持て木の
 隠れきまりけし雷前小階て小子をなす農夫面を振り
 あけて打むと雷言を申て汝我を打事なれ我必其恩
 と報之農夫何を以て報之と問雷神答て汝小子を打
 願極の舟を造り水と竹葉を浮べて汝をよも農夫
 其望は如く作て與ふれ忽霧もあらし雲をかきり雷神
 天小弁とて小程をなして農夫を妻男子とて小兒を
 蛇まじ事二遍して首尾を小垂し北兒十歳をなす
 朝廷小力人あり空聞て力を競む為小上洛して彼近邊の宿
 一時彼力人許小至其力人方八尺はりの大石を取扱小童

其石を取扱事三反小及以踏り地三寸入り力人これを
 又て恐れきり其後小童元興寺の僧小住其頃寺の鐘樓に
 鬼住て人を取ゆ度之小童これとて竊鐘樓に入り鬼と
 待小案のて其夜半はり鬼來りて童子を取て引出さん
 童子もも駭き鬼の髪を綱て引んを終骨あらしひて
 黎明小及く鬼漸小逝き鬼の髪を兒の手小残り血多流り
 此鬼の髪今小元興寺小あり其後童子盛長して優婆塞^{佛法}
 諸王等妨けて水と田を引んを時小優婆塞を引水と
 川て田に掛むして十餘人引荷小餅と作り持て水門の
 諸王等水口を塞ぎて寺の田を争ひ論小於是優婆塞
 二百人引動難き大石を取て水門を塞ぎ餅を以て渠を穿

あつたのまじり九

九

水と寺の田小かゝる乾きして能出未あり後僧とあつて道場
法師改むとふり今尾張國をば小兒とまをばふたふた
こまいとまいまいとふら未とふり元興寺此鬼の事と今
出羽陸奥とてふる未とふり蒙古襲とありいなり

尾崎。野崎

三河國碧海郡小尾崎に事あり牙と舊跡と今と乞兒
等と住る村ありと事御流と云ひ地を野崎岡崎と云
形ひくまひ処し下野崎荷前と荷前御調を云と調
せしと云やま吉田と云ふいと近御馬と云ふと其地神馬
會て伊勢の御贊を負ふと云ふのかりありせ八舟路に近
傳訓某河ふたのふり小伊勢は六月五月の月次祭の時調進
ま。系之明曳系。儀式帳も小赤引系と延喜式も見神鳥抄

尾張國赤曳。見え参河國。荷前御調。系と出。今義解。参
河赤引神調。系と云。三州額田郡西郡三好氏。者。今調進
ま。麻多と下。赤曳明神。傳。ま。年中行事。に赤曳荷前
御調の系。見へり。参河寶。飲。郡。小赤孫の郷名。り。傳。孫
安加比古。ま。赤曳の轉。ふ。又。ふ。北。あり。り。か。ま
地。伊勢。ま。の。人。も。関。東。と。今。道。の。桑。名。が。ら。河。端。を。渡。や
二見。ま。て。下。や。二見。の。た。り。万。葉。集。に。妹。も。我。も。い。は。の。ま。も
三。河。の。ふ。の。ま。も。も。を。ま。り

石控川の里

古飲ふ細川の岩間のつら底けきてはたのたをそあめ
花園山まを深山と云今八群積山といふ現山名は鹽齋
六所明神と云作齋と云ふ六柱の神と云明大寺村といふ

事てのまの九

祭り今三河所より花苑山と三河の四名所の一つ中む細川家
 大川某より浮浪人來りてぬ拍落をいふ事細川家の
 家令大河より姓の首を矢つらぬれあれ大川某大河の源を
 尋ねぬる細川の流をけりてみかばさるものなるか
 とるし以て傳へる傳訓聚ふるさくハ細川の里を塔の空と飛鳥岡の
 間ありてか葉集りし多武の幸也細川をみ合り南湖の細川
 中あり○細川家頼春の曾祖義季三河の細川に居り氏に
 頼之の執事とて義詮終臨て頼之の子を卿と遣ふ幸す轉
 子とい義満の父と汝かを謹て其教違事勿きして建徳二年
 楠正儀未奔り義満をれりて河内へ還り吉野を圍りて頼之の
 子頼元正儀を援志し南北合体神畧の京へ復しとて本を
 せんとり大和の細川三河の細川とて里をむ

三河のちんがらちんがら

秋田の八龍湖 琴河の水流入す湖の形もの浦と賀須とありふ
 似る主薪と揺り焚に寒とまのきき飯とくは是りて此火
 とありふ旅の團扇あり蒲のちありとる主薪起り旅世の
 以活香沼のをくもめ草をく秋後をわつ不出羽陸奥をハ
 わつとくをわつりて方言をわつりて秋田をわつりて
 文字をわつりて土埒の湊を林町とあり此わつりて旅と
 蒲とちんがら追ひ蠅と柿とみ形いりてのちんがらと
 かかれ九國風土器といふものその圖志たり傳訓聚よりちん
 團扇といふ侍名欽といふ横羽のあり蚊蠅を撲拂し意唐詩と輕羅
 小扇横流帶といふもの八延喜式小圓羽横羽をいふ同義也○
 軍配團扇と別製あり蒲のちんがら盛衰記よりわつりてちんがら

ちんがら

蒲扇之本草は東人多以蒲為之山嶺南以蒲葵為之琉球
より婦子の用は半面之半月扇より入り入りの中より
蒲扇よりしとるは必事之蒲扇は蒲の葉をびらきちりて
楨椰子の葉よりて作此國にも此おも圓扇より作りて
蒲の葉より入り入りて作りて作りて作りて

くわひ。ちり

世小掬飯みたててふものと握飯にぎりありあすもやき飯やきいりのり
くわひよりあつ餉飯くわひます出羽より作りて作りて
作りの佛より下のみ紙しまきまきあつ銅錢どうせんと包たぶり
かむり作りて作りて武器ぶきより狼筈ろうくわんより小鷹こたか將
り馬より鶏とりをわけて取物とりものより谷川やがわ士清翁しじゆおうより

さくはけ

近江國蒲生郡日野と古檜物郷といひしころ檜の名處なり
まゝ冬に取つて紫葉より檜葉よりしものと製せし是をわり大裡
小献こけん上かみよりあつみやまの里より清きよこれや小春の玉たまゆ
なまむりし和歌をむしりし下体訓げたい栗りしの梧捲くわくより
檜物の名徒然草とぜんそうよりの本より盛衰記せんさいきより舟ふねよりま
はみ本つり舟より又よりそれより舟物師ふねものしより職人
歌合うたがひ見へり新撰六帖しんせんろくてふ近江をわりのれ里のらは
花をわり折人も那曲物なまがまよりつるは楳はは用もち是をわり
は第一だいいちの里を日本紀にっぽんき蒲生郡遺通野ゆいとほのより遺迹ゆいせきを
りてひのりみかけし今俗いましよより魚の乾いしより煮
脂あぶらより又より日野の里に物詰ものづめふひをわり里に楳はの種
中なかより島中に今古樹いまこじゆ生なま残りしありそらよりしり

あつのまゆ九

八

是阿米の心云々万葉集二十卷一
道痛防入悲別之心作歌一首并短哥とあり久再真
阿等利加麻氣利由伎米具利可比利久麻互尔已波比
互麻多稱こそと吾二人と仙覚のり獨子鳥と契神の
あとのそくさわき群のり本居宣長久のり加麻氣利に
かびりし本と大平翁のり豐隆のりありてそくさわき
胡鷺と獨子多と六ありと群れありはひつるるりかぬと

酒殿歌

梁塵愚業異抄神樂のりにてらぶめと今於と合しきと
群れ女かまむしすもひつるるり本居宣長久のり古本東海寺
酒殿歌末位可止乃波介佐波奈波波曾と字利女
乃毛比波須曾比支計散波波波波止称利女と女食

の事を下りし下りまき袖中抄十九卷ふりまて之にけり中め
けりとのるにうれれとあれりひつるるり本居宣長久のり
工に顯昭云れとあまの賀茂のりとおふふかむとむり
はた女らんせりあのみかたりありてありたやめを申はそ
ととんれとめも申や 是ハ神樂ハ酒殿の教之とんれ
ととんせり又みせるとんれとんれとんれハ神田とんれ
とんれとんれとんれとんれとんれとんれとんれとんれ

きりとり

異本梁塵愚業按抄ふまりと申はそとんれとんれとんれ
まのりまき木の根と申はそとんれとんれとんれとんれ
とんれとんれとんれとんれとんれとんれとんれとんれ
不仁万為利天支乃称乎保利波牟天遠佐万左遠礼奴

あめまのり九

其次、衍字の多ありある里の童きりく虫の鬚を角と云
て吹りては蟋蟀の木の根を掘るは小角此を角と云
小角はあひりし

こむの志はのり

世小紺屋の白袴箕作が破箕中し諺ありては紺屋の生
漆草のこ業もれは藍坪入の津をあの間のく業
志は布袴を着たりまゝ箕作は朝夕市小賣の箕と作りは
吾家用小箕といひ古破れしよりて敷くは骨董業
編上巻に紺屋の白袴の事輯て其意を云「紺屋の白袴
とり諺今し下こまむは諺云「山内井慶安元「此句は
ふ雪や紺かき白袴といひ白あは「崑山集「明暦二年
載貞徳の句はこれかふも事なり案に當時の紺屋常袴

きぬとも名は此諺ありしやん今の世盲人様まをぬる袴
は遊女の常打掛と著るは街古の威儀なり下
中し下紺屋の白袴の諺と箕中り破箕と敷くは骨董業
諺は世のさやいしこま紺かき木子と裾の袴と出羽眞
合しうくとは昔けり片田舎は古風今に残まり

あかぬま

同書「風呂犢鼻褌」云「下小なあはを寛永正保頃錢
湯風呂の古圖と云り犢鼻褌をむしひたるも風呂入を
急がけりては画工の心得たる繪をこもあやと疑ふは
昔八民家のやき者も風呂入をあやと疑ふは
一代男「天和三代男「貞享」等のちふは錢湯風呂の圖と云り
皆心しこも風呂入を体と急けり東大門屋敷「貞享」の巻

あてのきり九

十一

標字とつまらさきりたと云ふは二種あり出羽陸奥より二種
 追撮を方言つ信濃より本標榜二室を以て此標也
 云ハ斐陀国よりこの標を近人の後能ありて今ハ此標を
 ったるハ此標の標をなすも標の標を標を標を標を
 の細子と木と云ふ赤標多し万葉集に木の實はちのみと
 はと云ふも中にもあるものこれ實と此標の實とをあるを
 鴨膳子事と云ふ銀杏と云ふもそれなりと云ふは
 木より標と云ふ山と標と云ふ第りて標之に曾農哥美は
 一巻に知行の標を乃實のそ或は云はれりて此伊豆大鳴
 よかありて標標と云ふ木よりなるに云ふは標は
 云ふは木と云ふも今に標はれ之此木乳房の標
 物に云ふもこれ木と云ふの實と云ふ標と云ふ又又詞草

小苑と云はれぬもの此と云ふ是と云は實れを同言と云
 なづけたりて此向に標葉の母と對ぶる必らと木の名を
 履きながら此の木古書にも今も今もいふは標葉小云標
 の實を云ふは字鏡標と木の實正知と云ふり又今の入文も
 よ云は標と云ふもふありて古くも標と云ふもいふは
 これを銀杏子なりと云ふと云ふは標と云ふは標と云ふ
 木と云ふは唯めめと云ふは標と云ふは標と云ふは標と云ふは

山中の石燈

本前福山の法幢寺小石燈籠ありり古石是火也と云ふ
 此の女の姿と云ふありて庭の隅より云ふは出羽雄勝郡
 藤倉の石の片垣に火の石と云ふ石あり又各郡の大谷に石と云ふ
 鬼火の石と云ふ石ありる石と云ふは必狐火と云ふは怪譚破帳

石の石燈

一巻の古物怪しき事いふべき山中は石州流の雅人所が
 津井谷の松屋よりいふ古昔の燈籠は云々引取
 夕山言早買ひしを根を引り庭前居させしを以
 身りの歡喜して秘藏けり夕山獨圍入り湯せり
 仰やく座とえられた彼石燈籠を灯中を物事きあり
 不審を布いなるありしを燈籠の側へより又れた火袋の
 うちと蜘蛛の巣えりし火の気もなるが之を
 椽側よりせり又れた火の気もなるありしを
 又ありて見ま火の気もなる椽より又色ハ火も
 され此火をせりしを翌朝ありて前夜のそなは
 の松屋をひき置價を損りて右の燈籠を歸し其後此
 石の譯を聞しよ此石駒込大寺代惣印塔乃敷くげりて

振出しありりな樹屋より右の通陰火の燃しを
 見て中をくぐりかめりしよゆ返ぬ寺にて是を
 多古代の過去帳と云えられた佐久間大膳亮忠元末の妹の
 墓所に置置石燈籠なりてこれを古物と添くともい
 きよふのゆへにせりし法幢寺の石燈籠とすたひや

うまをせり

英一蝶がすまふ墓に鹿嶋のいもれがまをて馬
 せてありりき人の又せりこれ世のむく人のをれよあわ
 さいらゆる證もや八鹽路翁著鹿塚草紙壹巻上常陸
 國鹿嶋郡鎮座鹿嶋神社祭神獲槌神也云該曰神前上石
 中の石あり又常陸帶て世俗の能事ありあつたの
 みちのてをる鹿嶋常りてはりもあひ今もなまかてし言

あてのよめり

十四

云々、鹿嶋事觸鹿嶋躡俗諺云々此案由神人等
をもつ託宣の如き事と人小浩け知れも職の事觸
甚尾籠多者之寛永年中事也諸國に疫病流行し
度多の津にありて吾神輿を諸國に渡すに疫病退散
託宣に依りて神輿を神宮より出りて村に渡御する事
疫病平愈を在り流御の村に巡行し觸れざるに備津國成郡
本莊村にて神輿居りて石の如く動かさず又鹿嶋躡
といふ事神輿渡御の村にありて老若男女神輿に渡御の送
迎のよし手もち足とて歩み行きて夜更歩行しとて
いひせりや曲と攝陽郡談より世今に遺風と偽り
巫祝等の人を欺くことと成りて実流用きり流源順

倭名録に巫祝之類に早しし宣ありと云

ふれぶち

冬下塵塚草紙三卷兼好法師俗語よりとり兼好吉
田に神職の神の事喰神奴と云れ世に見限りて出家
頭世に狂界と神職より人の風を置りて神敵の徒を
其流より吉田者流乃神道に西郡習合れ神道と云れ
彼吉田の兼好と人皇九代後宇多院の弘安十年帝崩御時
出家せしむ都に住せし伊賀國へより權守橋成忠の
家へ養れ居り其頃兼好行年六十歳と云時小成忠の妹
小辨より女小密通せし事露頭しけれその道に養れ
成忠情の著るく又以後に比度と別庵と造りてその名を
けい小舟通路の道と絶時と送る 忍ふ山まてかた

あてのまじり九

りありぬ。諸人ものゝれ。此事園大曆上攀らぬあり
兼好長時と神家の久世語。非きまの出家還俗して神人
と云ふ。その一派の浮屠等自是を善くやういふ。又下りかぬ
り。或母子と云ふ。小吉田家ふり。かたりも。事なり。出家の
り。し。せ。人。か。れ。り。ま。伊。賀。の。つ。小。住。外。と。南。朝。こ。の。り。
け。し。に。も。伊。賀。の。上。那。塚。の。近。き。ま。て。乾。抽。塚。と。い。ふ。の。靈
あ。り。て。今。は。兼。好。塚。と。い。ふ。の。と。り。

まひりけ

此葦白^{シロアシ}黒^{クロ}生^ナあり。玉^{タマ}を^をと^と甜^{アメ}味^ミし^しり。山^{ヤマ}賤^セ此^{コノ}葦^{アシ}又^{マタ}付^ツく^くあ^ある^るを
し^しり^りを^を舞^マと^とま^ます^すの^の名^ナと^とり^りそ^そと^と下^ゲ葦^{アシ}よ^よと^とその^{その}始^{ハジ}
と^と靈^{レイ}の^の形^{カタ}と^とい^いふ^ふや^やす^す。宇^ウ治^ジ物^{モノ}語^ゴ。大^{ダイ}神^{シン}言^{ゴン}源^{ゲン}隆^{リウ}國^{クニ}御^ミ。後^ゴ編^{ペン}
土^{ツチ}卷^{マキ}雜^{ザツ}事^ジ部^ブ。上^{ウヘ}尼^ニ山^{サン}食^{シキ}舞^マ葦^{アシ}語^ゴ。い^いふ^ふり^り小^コ今^{イマ}と^とし^しり^り京^{キョウ}上^{ウヘ}の^の

木^キ伐^キ人^{ヒト}も^も北^{キタ}山^{サン}よ^より^りと^と道^{ミチ}を^をさ^さり^りて^て角^{ツノ}を^を四^ヨ丈^{サツ}を^をり^り山^{ヤマ}中^{ナカ}と^とは^はい
け^ける^るふ^ふ山^{ヤマ}の^の奥^{ウチ}は^はこ^こり^り人^{ヒト}の^の来^キ。郡^{クニ}す^すあ^あや^や師^シ者^{シャ}は^はぬ^ぬと^とや^やか
い^いふ^ふた^た尼^ニ四^シ五^ゴ人^{ニン}を^をり^り舞^マを^を介^ケて^て出^デま^まり^り木^キ伐^キ人^{ヒト}も^もこれ^{これ}を^を各^各
に^に伐^キす^す人^{ヒト}も^もた^たあ^あじ^じ天^{テン}狗^コや^や鬼^キ神^{シン}者^{シャ}を^を怖^{オソ}れ^れ居^イる^る。此^{コノ}尼^ニも^も
木^キ伐^キ人^{ヒト}も^もさ^さと^と又^{マタ}つ^つあ^あり^りこれ^{これ}は^は木^キ伐^キ人^{ヒト}も^もを^をれ^れを^をる^る是^{コノ}は^ハい^いふ^ふ
た^た々^々尼^ニ君^{キミ}達^{タチ}の^の深^{フカ}き^き山^{ヤマ}奥^{ウチ}に^にか^かた^た舞^マ出^デる^るよ^よも^も同^{ドウ}は^はれ^れバ^バ尼^ニも^も
答^{コタ}へ^へ我^ガ等^{タラ}々^々を^を以^もて^て巴^ハり^りこ^こら^らに^に定^サめ^めて^てお^おを^をり^り。さ^さと^と云^イふ^ふも^も
あ^あし^しを^をさ^さり^りは^はあ^あ。尼^ニも^もあ^あり^りに^にて^てい^いふ^ふも^もん^ん。と^と山
小^コ入^イら^らぬ^ぬ道^{ミチ}を^をさ^さり^りて^て出^デま^まり^りに^には^はさ^さり^りき^き葦^{アシ}は^はあ^あ
と^とい^いふ^ふ物^{モノ}の^のや^やす^すに^にこれ^{これ}を^を死^シて^てら^らに^にせ^せり^りと^とい^いふ^ふ醉^{スイ}ひ^ひを^をせ^せん
中^{ナカ}山^{ヤマ}只^{ただ}ひ^ひぬ^ぬも^も飢^{ウツ}へ^へ死^シん^んり^りと^とい^いふ^ふ焼^{ヤク}て^てい^いは^はさ^さふ^ふき^きハ^ハめ^めて^て舞^マ
に^にけ^ける^るよ^よに^に事^ジを^をい^いふ^ふて^て多^タく^くい^いふ^ふ小^コ々^々を^をか^かて^てお^おを^をり^り舞^マ

布^フの^のま^まし^し九^ク

上^{ウヘ}六^{ロク}

有り心もいとおやきと思ふもや久もまけけり木代人
中もあやしくおひさぐ物のかかりけり尼ともか食残り
葦と取てふぬ心遊に舞けり其後に尼とも木伐人
ぬかひ小舞はまきてわひけりかてふ志づくありと酔ひ
すにかりて道とるる海とあり海なりまぬり海
葦と舞葦といふなりやんくをほくもをなるも
ことその藤けのてく碑るものよあさるる

八省の官八省名目のゆゑ

大鏡三十七代ありて法に於孝徳天皇も中たふるる神代
よりゆひ八省百官左右大臣内大臣なりはめひ左大臣
と安倍のやうにまろ右大臣は蘇我乃山田のりえなると
内大臣と大中正の鎌子れむりやまよとて吉川廣直

私云左大臣右大臣の名は此時より始るその官職を神代より
天照大神の時不定は高皇産靈尊兒屋命大玉命是也
八省の官も八省乃名目は此時定まり固官職を大神の時
定め法に記さるる

ちこの記

信濃路桔梗原をに兒の記とて兼服の形は杉葉
色のに咲世俗をシウコト草名と牛而す闘牛節苗
をよとて此草秋田の雄鹿の北の浦のゆりふと海の花は
そとて凝豆草といふ此草を煎くその汁をこし布に漉し
此里深成ると豆水種とて之民家の女帯前帯を洗師へ
負の七事古びぬと此守もて津久續日本格仁明天皇の時
承和七年五月戊戌天皇除素服着堅絹御冠椽漆御衣以臨

朝也御簾及屏風之縁並用墨深細布但御座者施草於
砥礪之上不立御榻より入りたる御簾の縁御屏風の縁
細布の墨深と出羽の雄鹿の兒の花深小似り

豊宮河年魚贊

童遊の諺小京の三十三軒堂の佛の数が三十三三體は
まことに三十三百三三躰こと教りたる此事同く西三度息の内
唱少と勝少とあり事ありまゝ尾張國の萱津の敷生此菓
物の瓜茄子の御貫を執田宮に元且拾二籠百初十日土筆と貫
其脚の料とむりとは三貫百三十三文流りか今志く此教に
某よりてろ志くむ伊勢の渡會河豊宮河年魚とて天恩徳海喬孫
桶守氏三十三百三十三尾の年魚と漁て内外御所の年中朝夕の御作
供もあつたりといふ是も三十三百三十三あり

わむらひいふ

いふ險崖き磐石すし巖の聳ててむむらひいふ神座の
義もありまむらひ山あり倭訓栞むらひのう熊野新宮近き
在り高倉下命と祭り中下續古今集ふ 三熊野の神の山の
石のみのりまむらひ猶いのろ石のみと神武紀より天磐石
首むらひまむらひよりかんく山手つむらひの志く志く
く志く志く山手と高き志く好て木の根もすむらひの松の根り
枕もむらひも志く志く志く志く志く志く志く志く

杵形餅

くはのちもちといふと餅をりまむらひ祝事ありは此を造りて
くはのちもち祝事ありまむらひ神道名目杵三巻此もちの圖と志く
くはのちもち祝事ありまむらひ杵三巻此もちの圖と志く
くはのちもち祝事ありまむらひ杵三巻此もちの圖と志く
くはのちもち祝事ありまむらひ杵三巻此もちの圖と志く
くはのちもち祝事ありまむらひ杵三巻此もちの圖と志く

「五五」
 餅モチの形 年始 小竈神に供せしむに於て 餅何の項ありの
 物や文明中記すて 其名あり 今製せる所 其形 楕圓
 して 長一横 小世俗間 竈カマドに供せしむ 黄金餅オウゴンモチと云有此一変
 せる者あり 又畫所預家古来より 此の餅と云を竈
 神に供せしむ 其形同くは 此の餅と云を 出羽 國秋田
 雄勝の所の郡より 此の餅と云を 始 家ウチに在る所より 始
 小竈に造る 圖俗に 小判形コウバネガタに 中 紋ありて 長七寸 巾四
 寸 其の形 當を横さまに見せしむが如きなり 乃法家ノウホウカの 式あり
 て 此餅モチを 制クリ供ケへて 家におひりり 此餅形の餅の事と
 前におしむに 亦此餅も 志す 此餅の 名は 荷
 の赤神に 供へる餅の事なり 宇賀祭に 義とて 倉稻魂クライヌと
 撃つるの餅とて 亦其義をり 赤縣神と云ふ

赤古具ニゾグサ

前マのちの 赤古具ニゾグサの事と記す 雄鹿の浦人の 凝液コウエキ豆マメや
 豆布マメフの義タテマツを言考し 豆マメと云は 豆マメと云ふことなり 此は 豆
 豆の兒マメゴに 豆マメと云ふことなり 豆マメと云ふことなり 豆マメと云ふことなり
 豆マメの形 甚紅ニゾグサの丹マメと云ひ 丹土マメツチ丹達マメタチの丹マメと云ひ 丹和マメワの意
 あり 豆マメの強ツヨク言ハハシや 万葉マンヤクに 足柄郡アシノあり 其の波朝ハスの
 神カミに 赤古具ニゾグサ佐サのは 亦此餅の 名は 荷
 あり 亦此餅の 名は 荷
 あり 亦此餅の 名は 荷

遠江國の公羽の物語の物言ふに 若かりしころ 茶原郡チハノに 草刈クサギリ
 十九

童の小石を投て草印地クサノシロの事とて戯遊ウケアソビひそと草の鹿
 猪鹿の隠ひありんと追ひがはせたりとて草
 鹿射式をいふ此字をわたりて猪鹿追ひこそ草創なりぬ鹿
 訓は草鹿丸物をとるなり吾妻鑑をよみたり谷川和訓集を
 みる草鹿の義飛草の鹿と象と鹿りの名之稱ひの事と
 るあひ替古名とて後人草とて鹿と造り或は張腕をよす事
 なり建久三年小行をいふ東鑑よりなり杜氏通典に馬射
 の式をいひよも綴波為西鹿馳馬射之なり又盛衰記に
 興市々事小五六歳し成りまひたり小弓にさすなり
 草鹿とて遠江風土記に般石田郡豊玉比咩神社夏六月五日
 之夜有草鹿之遊庶民之中長者馬者自國守命之令行此禮曰
 草印地とてなりと下此遠江に美原の翁がひたり

かたどていせい

かみあち

みちには津輕をりて神事或は病者の祈禱をいふ火土三昧とて
 山伏集りて鍛を焼て是を掴みあは懐きき湯を沸しそいふ湯
 釜の内より手とて入るき廻りあり是かちこれ風をいふ
 同本にふりち日本紀に探湯をいふ盟神探湯とて久り或は納釜
 意沸攘手探湯を或焼て火色置乎掌とて今此御湯花の
 言本なるなり真臘風土記に以鍋煎油待湯探之とて近
 見へり系よりて是御湯とていふ湯立神樂とて神事
 と行ふ湯立神樂と弓立と湯立小混雑と云ふなり

かむいしち

信濃國にていふ唄に「志のむ夜夫とぬかちあふさつりめけ

あはれあり九

此が電けぬ。かんちちと多うて雷雨と下雷雨の義と里神神子の舞と神屋ますかんとやいふとこれと下倭訓聚ふんちのくりに頭胎説く庭と神のたまたま諸社行幸の庭の座の又うりまもいふと下奉相記の降臨の地と神子と下梓神子の詞家来の事と下八つと下いふと下

月落鳥啼のわづらひ

月落鳥啼霜滿天江楓漁火對愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到客船一詩と誦み長崎の今と月落鳥啼霜滿天と一詩と誦みてと詩の意解と寒山寺に近く鳥啼山と一山あるは清公の詩と誦みと飲中八仙歌と李白斗詩百篇長安市上酒家眠天子呼來不上船とみよとそのころ知りがとくふと下と下船のわ

げふる処しあはれと上船と誦へ上船と俗より云紋の事とと龍公美しと下

あてのまふ九

共止

破損あり

